

## 郁達夫年譜

著者	胡 金定
雑誌名	言語と文化
巻	10
ページ	161-188
発行年	2006-03-15
URL	<a href="http://doi.org/10.14990/00000435">http://doi.org/10.14990/00000435</a>

## 郁達夫年譜

### 胡 金 定

1896年（丙申 光緒22年） 誕生

12月7日（旧暦11月3日）中国の浙江省富陽県満州役所管内にある郁という家に生まれ、名前は文、達夫と付けられたが、幼名は蔭生、または応生と呼ばれていた。祖父は郁仰高（字聖山、1863 - 1868）、医務を職業とする。父親は郁企曾（字士賢、1863 - 1900）、早年に塾を設立して自ら授業をやっていたが、後、富陽県役所戸房に司事（秘書）として務めながら、漢方医を兼業していた。長兄は郁華（字は曼陀、本名は慶雲であり、幼名は廉生（1884 - 1939）である）、浙江省の最初の国費留学生として、日本の早稲田大学と法政大学に留学した。卒業後帰国し、外務部天津交渉役所の翻訳者・通訳者や京師高等裁判庁推事などとして活躍していたが、「南社」に参加したことがある。1939年11月23日、上海にある江蘇高等裁判所の第二支所刑事法廷長の在職中、日本のスパイに刺殺され、殉職した。次兄は郁浩（字は養吾、幼名は浩生（1891 - 1971）である）、清の時代末、公費で杭州陸軍小学堂に入学。民国初年に、兄曼陀と一緒に北京へ上京。国立北京医学専門学校に就学し、卒業後、1919年第2回高等文官の試験に合格したので、海軍へ配属された。1926年前後、故郷富陽に戻って、終身医務にして生計を維持した。姉は郁鳳珍（幼名は阿鳳（1894 - 1920）である）、7歳のとき、養女として、田舎に送られ、26歳の時、病死した。

1899年（己亥 光緒25年） 3歳

長兄郁曼陀は己亥年科院試験に一番で合格し、博士弟子の候補になる。

1900年（庚子 光緒26年） 4歳

重病中の父親郁企曾が死去した。

1902年（壬寅 光緒28年） 6歳

春、郁家の親友葛宝哉の私塾に入って啓蒙教育を受ける。

1903年（癸卯 光緒29年） 7歳

春、富陽本県内で比較的大きな魁星閣という私塾に入学し、張惠卿に教わる。

1904年（甲辰 光緒30年） 8歳

春，富陽県の公立私塾「春江書院」に入学し，本格的に伝統文化と經典を勉強し始めた。

1907年（丁未 光緒33年） 11歳

春，書院から再編した新式学校 - 富陽県立高等小学堂に入学した。

1908年（戊申 光緒34年） 12歳

春，成績が優秀のため，2年上のクラスへ飛び級した。

1911年（辛亥 宣統3年） 15歳

1月，県立高等小学堂を卒業。賞として『呉梅村詩集』を学校から贈られた。

2月，杭州府立中学校に合格したが，学費の捻出が不能のため，嘉興府中学校に変更した。

6月，病気のため，富陽に戻って休養する。

9月，杭州府立中学校に転校し，五言詩・七言詩を試作し始め，『之江日報』，『全浙公報』などの新聞紙に匿名で投稿する。

10月，辛亥革命が爆発すると共に，杭州は混乱に陥り，学校が休講したため，母に呼び戻された。

本年，作詞数が不詳だが，その中「詠史三首」は最も早期の試作品として現存する。

1912年（壬子 民国元年） 16歳

春，杭州府立中学校に戻り勉強しようと考え，数ヶ月にわたって，親戚の家に寄宿していたが，開講のめどが立たないので，故郷に戻って独学する。

9月，アメリカ長老会が杭州に設立した之江大学（元育英書院）の予科に入学したが，後，学校当局の学生運動を弾圧したことに反対し，当局に除名されたため，関係当局に提訴したが，無効だったので，故郷に戻り自習する。

本年の詩の発表は現存なし。

1913年（癸丑 民国2年） 17歳

春，杭州にある別の外国宗教団体浸礼会により開設した惠蘭中学校に転入して，英語を専修した。しかし，学校当局及び教務長などの奴隷化教育や学生人格を無視する等のやり方に不満，3ヶ月後に退学し，再び自宅に戻って独学する。

9月下旬，長兄郁華が日本へ司法などを視察する際，兄夫婦と共に日本に渡る。

10月末，東京に到着し，その後，兄夫婦と一緒に東京の小石川中富坂町7番地に，1年間ぐらい住んでいた。

11月，神田正則学校の予科に入り，中学校の科目や日本語を勉強し始めた。

本年の作詩数は「郷思」、「客感」など五首ある。

1914年（甲寅 民国3年） 18歳

7月、東京第一高等学校が特別に設立した予科の入試に合格し、公費学生の資格を獲得した。一部（文科系）に入学して、本格的に留学生活をし始めるようになった（その前には、千葉医学専門学校の試験を受けたが、失敗した）。

8月末、長兄は家族と共に帰国。後に北京大理院の推事に就任する。

9月初め、学校の寮に移り住んで、公費を受け、独立した生活をおくり始める。

本年、「奉答长嫂兼曼兄」等の詩は四首ある。

1915年（乙卯 民国4年） 19歳

6月、上海にある「神州日報」に本名で詩作を連続し始めた。予科が終わる前に、長兄の意見を受け入れ、三部（医学）に編入した。

7月、東京第一高等学校を卒業。

9月、名古屋にある第八高等学校三部に配属され、名古屋入りした。

11月、第八高等学校の刊行物「校友会雑誌」に詩を発表し始めた。合わせて三十四首の詩があるが、すべて「春江釣徒」の名で公表した。

本年、刊行した詩及び未刊の詩の数が大幅に増え、現存には四十八首ある。この頃から「金絲雀」などの小説創作を構想し、その挿入詩も考えていた。『沈淪』という小説に引用された「席間口占」という詩もこの時期の詩である。

本年の詩を『乙卯集』に編集した。

1916年（丙辰 民国5年） 20歳

5月初めて、当時『新愛知新聞 漢詩欄』編集を担当する詩人服部担風を訪ねたが、二人が忘年の交わりとなった。それから、断続的に『新愛知新聞』に詩を発表するようになった。

6月、担風の紹介で、その門下の有力な弟子の一人、富長蝶如と知り合った。その後、日本での数少ない親友となった。

9月12日、担風が主催する佩蘭吟詩の中秋名月観賞宴席に出席した。

本月、一部（文科系）に戻り、法学部政治学を専攻し、再び1年生から習い始める。

この時期から、講義に関心が薄くなり、広く大量にロシア、ドイツ、イギリス、フランス及び当時の日本の小説と一部分の論理関係の書物を読んだ。

10月10日、長兄に手紙を送る。中には、次のように書く。弟としての僕の見れば、国事は根本的な問題として注目すべきである。国の再生を考えていれば、社会を改革すべきである。

本年、作詩の数は五十首以上にのぼる。その中、大半の作品は中国国内や日本の新聞、雑誌

に発表した。

1917年（丁巳 民国6年） 21歳

1月1日、上海の『神州日報・文苑』に詩「夢登春江第一樓巖子陵先生釣台，題詩石上」を掲載し、「自ら投筆吏だと慙愧し、君をせしむ台に上がり難し」と感嘆し、再び惆悵していた。

6月27日、名古屋から初めて帰省の途について、途中で作詩し続ける。

8月、母親の意に従い、富陽雷井の孫孝貞の娘、孫荃（字蘭坡 1897 - 1978）と婚約した。故郷に1ヶ月余り滞在した。

9月、富陽を離れ、杭州、上海を経由して日本に戻った。

10月、婚約者に詩と写真を送り、婚約者の名前を変えた。

秋、チブスに患って入院し、2ヶ月ほど学校を休んだが、翌年の年末にやっと全治した。

12月、休養のため、熱海観光地へ。19日、初めて、酔っ払いになって遊女屋で夜を過ごした。

本年、春から日記を付け始めた。作詩（作詞一首）の数は前の2年とほぼ同じ。その中の多くは日本『新愛知新聞』に発表した。

本年、「相思樹」などの小説を試作した。

1918年（戊午 民国7年） 22歳

1～4月、治療、作詩、読書、親友訪問、婚約者との文通などをしたりして過す。

5月、「中日軍協約」の締結に反対するため、学校を休んだり、中国に帰国し政府に抗議したりする呼びかけに応じたが、団体の行動に参加しなかった。

6月、生活を維持するため、東京へバイトに出かけた。

7月、名古屋に戻り、中国国内の政治状況を日記の中に「中国を失わせる人は中国人なり、われ一人救国せとも、いづくんぞ得るべき」と感嘆した。

12月25日、5月から書き始めた『自述詩』を十八首完成させ、序文をつけ、写しを服部担風に贈る。

本年、作詩の数は五十首以上のレベルを保っている。

1919年（己未 民国8年） 23歳

1月、服部担風が主催する藍亭新年雅集に出席し、唱和（歌合せ）する。

2月、留学生と一緒に、日本を訪問する浙江教育視察団を案内して、名古屋の小中学校を参観した。

5月5日、日記に中国国内で起きた「五四運動」に関する強烈な反応を示した。

7日、国の恥を濯ぐ気持ちを表そうと、わざと学生運動の場面をバックにして写真を撮っ

た。本月、「侍女の梅濃と別れる詩」を作成し、彼女をモデルに小説『両夜巢』を作成したが、現存なし。

7月、名古屋第八高等学校一部丙類を卒業、東京帝国大学に進学する予定。

9月4日、長兄の命令に遵って、中国全国の外交官及び第2回高等文官試験を受けるために、横浜から一時帰国したが、26日、外交官の試験に落第した。

10月13日、北京で胡適に書簡を送り、尊敬の意を示した。胡適からは返事が来なかった。

19日、高等文官の試験に出たが、27日、再び失敗に終わる。

11月、北京を立ち、日本に戻る。東京帝国大学経済学部に進学。第八高等学校の同級生数人と手を組んで、文学雑誌『寂光』（別名『凝視』）を創刊する計画を立てたが、経費の捻出が困難であったため、断念した。

本年、詩を四十首作成。小説「圓明園之夜」（未完）を創作した。「達夫筆記」を創作して、中国の『之江日報』に連載した。日本当代作家の作品を大量に閲覧しているうちに、人気の新進作家佐藤春夫に心を引かれた。

1920年（庚申 民国9年） 24歳

2月、房州海岸へ療養に行った。そこで、成倣吾、張資平、郭沫若、田漢などと一緒に、文学社を設立し、新文学雑誌を創刊する計画を立てていた。

5～6月、『太陽』という雑誌の「漢詩欄」の編集者高野竹隠と知り合った。『太陽』とは郁曼陀がよく投稿した雑誌である。高野は森春涛（森槐楠の父）の門下弟子である縁で、7月から翌年までの間に詩の多くは『太陽』に発表していた。

7月14日、双方の両親に催促され、帰省して孫荃と結婚したが、新婚の段階から、あまり性格は合わなくて、愉快に過していなかった。

8月、下旬日本に戻った。

10月、「過蘇州」と「渡黄河」の詩を創作し、去年、試験のため、帰国途中の心境を追憶した。

11月、数首の詩を作って新婚期間の様々な不愉快なことを綴る。ほかに、「寄内」などの詩を五首作った。本年、作詩の数は約四十首であった。年末、小説「銀灰色的死」と小説「還郷記」を書いた。また、「中国貨幣史」、「中国外交史」などを卒論の代わりに作成しようと思ったが、未完のままであった。

1921年（辛酉 民国10年） 25歳

春季、当時日本高等師範に就学している孫百剛と出会い、それ以来、親交を深める。

5月4日、随筆「夕陽樓日記」を創作して、中国国内の文化界における不正な現象を激しく批判した。9日、小説『沈淪』を修正し完成させる。

6月8日、住居のある東京第二改盛館で正式に創造社を設立した。郭沫若、張資平、何畏、

徐祖正などが出席した。席上、郭沫若が命名した結社の名称、季刊雑誌、叢書などの出版に関する議題が採択された。いままでは、郭沫若、成倣吾、鄭伯奇らと一緒に小さい同人誌『格林』(Green)を編集して、お互いに作品や訳文について意見を交換していたが、雑誌名を『創造』に変更した。14日、小説「友情与胃病」(別名「胃病」)の創作が完成した。

7月7日、小説「銀灰色的死」は上海の『時事新報・学灯』にT.D.Y.の名で発表した。11日「茵夢湖的序引」を作成。21日、「施篤姆」を作成。27日、小説「南遷」を作成した。30日、小説集『沈淪』に序文を付けた。

8月11 - 20日、栃木県にある塩原温泉へ避暑に行った。30日、「塩原十日記」を作成した。9月初め、すでに4 - 5ヶ月にわたって、上海泰東書局より『創造』季刊の出版を準備していた郭沫若の要請に応じて、帰国し出版準備にとりかかった。29日、「純文学季刊『創造』出版予告」を作成、『時事新報』に載る。その中の「わが国の新文芸は少数の偶像に左右されている」という言葉で文学研究会のあるメンバーから不満を買った。

10月初め、雑誌の出版経費、生活費を稼ぐため、郭沫若の推薦を受けて、安慶市にある安徽公立法政専門学校英文科の主任に赴任した。2 - 6日、「蕪城日記」を作成。15日、小説集『沈淪』が上海泰東書局により出版され、毀誉の批判を巻き起こした。安慶で教員を担当している間に、遊女海棠に出会い、親交を深める。

12月、「将之日本別海棠」(詩三首及び序文)を作成した。

本年、詩は四組二十二首までに減っている。小説二篇、評論一篇、日記一組を発表し、作品集を一冊出版した。

1922年(壬戌 民国11年) 26歳

1月、『創造』季刊誌創刊号の発行を準備するために、安慶から上海に出かけた。

2月、安慶での生活を題材に小説「茫茫夜」を創作した。その他、隨筆「芸文私見」も作成した。

3月1日、東京帝国大学の卒業試験を受けるために、日本に渡る。15日、出版予定の『創造』季刊創刊号が事情により延期された。26日、周作人が『晨报副鐫』で「沈淪」を発表し、多くの批判に反撃し、小説「沈淪」を高く評価していた。31日、日本東京帝国大学経済学部経済学科の卒業試験をパスした。

4月25日、経済学学士学位を取得し、卒業証書もらった。28日、「懷郷病者」小説を作成。本月、東京大学入試免除(学士の学位を取得している人に限り)の入学書を提出し、受理して、東京帝国大学文学部言語学科(申込み締め切りは5月13日であるが)に入学した。

5月1日、『創造』季刊誌創刊号は上海泰東書局より発行された。小説「茫茫夜」及び隨筆「芸文私見」は注目され、反響が極めて大きかった。本日、日本に派遣している公費中国留学生の代表として、公費支給の問題で政府と交渉するため、上海に戻った。2日、杭州へ行

って、浙江省の教育当局と交渉したが、20日間ほど滞在していた。

6月3日、東京帝国大学に戻って勉強に専念する。22日、「『茫茫夜』発表以後」を作り、中国国内の読者の強い反響に対して、これをもって返事を出したことにしたわけである。

7月、中国国内の文芸事業の発展及び創造社の編集事業などのこと、留学経費の不足問題などの理由で、19日に帰国することにした。これで、10年間の留学生活に終止符を打った。20日、上海に到着。26日、散文「途中」(別名「帰航」)を作成した。

本月、小説「秋柳」を作成。小説「風鈴」(別名「空虚」)を書きなおした。

8月4日、小説「血涙」を作成。25日、『創造』季刊誌第1巻第2号に小説「風鈴」(後に「空虚」)及び随筆「夕陽日楼日記」を発表した。

9月17日、『努力週報』第12号に胡適「編輯余談 - 人を罵る」という文章を発表した。それで、創造社と胡適らとの論戦を引き起こした。

本月、安慶に帰り、安徽公立法政専門学校で教鞭をとる。妻孫荃を迎えて、同居する。

10月3日、「胡適先生に回答」を発表。31日、一幕劇「孤独的悲哀」(後に「孤独」)を作成した。

11月20日、小説「采石磯」を書く。文章には胡適との揉み事を示唆した。その書き方は傲慢で、文字表現も乱暴であった。

12月25日、小説「春潮」(未完)を発表。

本年、個人生活が不安定に陥ったこと、小説の創作に力を注ぐことなどで、詞を一首作成したが、詩の数はなし。小説を六篇作り、その中の四篇は発表した。ほかに一幕劇の脚本を一篇、訳文を一篇、随筆を五篇、散文を一篇作成した。

1923年(癸亥 民国12年) 27歳

2月初め、安慶の教職を辞めて、家族とともに上海に戻った。まず、妻を富陽に送り、自分一人で北京の長兄の処へしばらく居た。17日、周作人からのお招きを受けて、宴会に出た。その時初めて魯迅と出会う。魯迅との話し合いはうまく行ったので、27日、お返しの気持ちで、魯迅を呼んで招待する。その後、親密な関係を結んだ。

3月、東京帝国大学文学部が学校の規則に遵って、学籍が取り除かされた。月末、祖母戴が病気で亡くなったため、富陽に帰る。出発する前、魯迅に手紙で知らせた。

4月3日、富陽を立ち、上海に戻る。創造社や、所属刊行物の編纂を担当する。6日、小説「蕩蘿行」を創作した。

5月13日、創刊したばかりの『創造週報』編集を担当する。15日、胡適から手紙が来た。「夕陽日楼日記」の件に関することを説明した。17日、胡適に返事を送る。19日、随筆「文学上の階級闘争」を書いて、文学は人生を表現すると主張。本月、胡適、郭沫若、郁達夫らは互いに訪問しあう。

6月11日、評論『MAXIISTIRNERの生涯及びその哲学』(別名「自我狂者MAXIISTIRNER



の生涯及び哲学」)を創作。17日、随筆「芸術と国家」を書いた。現行な国家制度は芸術の敵である。大同世界になる日こそが、芸術の理想が実現される日であるという考え方を示した。23日、小説「青煙」を創作した。

7月15日、小説「春風沈酔的晚上」を創作。21日、編集長を担当する『中華新報』の文芸・学芸欄に『創造日』が創刊される。「創造日宣言」を発表。28日、「『蔦蘿集』祝詞」と『蔦蘿集』自序」を作成。30日、散文「帰郷記」、31日、「『蔦蘿集』の最終編を完成した」を作成。『蔦蘿集』を(小説散文合集)一冊に編集。

本月中旬、故郷富陽に戻ってしばらく滞在した。

8月16日、小説「秋河」を作成。19日、散文「帰郷後記」を創作。26日、評論「文学鑑賞上之偏愛価値」を作成した。

9月10日、小説『落日』を創作。19日「蘇州煙雨記」(未完)を発表。25日「THE YELLOW BOOK及びその他」(別名「集中于黄面志的人物」)を作成した。

本月、小説「離散之前」を創作した。

10月5日、北京大学の招聘を受け、政治、経済及び史学学部の統計学の講師になる。8日、天津に到着。散文「海上通信」を創作、9日、北京に到着して、長兄の家に仮寓する。

本月、『蔦蘿集』は上海泰東書局により出版。創造社「辛夷小シリーズ」の第3種類として出版。

11月2日、『創造日』が101回目の出版で休刊した。

12月1日、小説「人妖」(未完)を発表。17日、「対話」を発表して、政局人事の腐敗を非難し、中国の革命形態を、新しい猿が古い猿に取って代わるに過ぎないと比喻した。

本年、前年度と同じ、詩の発表はなし。小説、散文をそれぞれ六篇ずつ発表した。文学評論、随筆は十篇。

1924年(甲子 民国13年) 28歳

1月15日、散文「零余者の自覚」(別名「零余者」)を創作。25日、散文「手紙一通」を発表。本月、田漢は創造者を離脱した。

2月7日、散文「北国の微音」を作成した。

春季、妻孫荃と長男を北京に呼び、長兄の家に仮寓する。後、家を借りて引っ越した。

7月3日、魯迅が初めて来訪し、『中国小説史略』を贈呈された。本日夜、文学青年陳翔鶴、陳炜謨を連れて、魯迅を訪問する。

8月14日、小説「薄奠」を創作した。

10月、旧作小説「秋柳」を書きなおして、序文を付ける。

11月13日、先方の要請で浪人の文学青年沈從文を見舞いに行き、お金をあげた。本日夜、「ある文学青年への公開状」を作成した。

12月7日、小説「十一月初三」を書いて、自分の誕生日を記念する。14 - 16日、小説「秋

柳」を發表。23日、「秋柳」の反響に対して、「私は「失敗した」ことを認める」を發表して、批判への弁解にした。

本年も、詩はなし。小説は三篇、散文は五篇、文学評論は一篇、隨筆は二篇を發表。

1925年（乙丑 民国14年） 29歳

1月、隨筆「骸骨迷戀者的独語」を書いて、国学の庸俗化に反対する。

2月、国立武昌師範大学の学長石瑛（衡青）のお招きにより、北京を離れその大学の文系教授に赴任する。

4月10日、文学評論「文学における殉情主義」を發表。

5月17日、小説「寒宵」（未完）を創作。19日、小説「街灯」（未完）を作成。

23日、成倣吾が上海に帰るために『倣吾を見送る』を作成。

夏、武昌を立ち、北京に戻って、北京にいる妻と子供をたずねる。

10月中旬、再度北京に戻る。武昌師範大学の内部紛争に関して、「通信 - 一言申し上げる」と言う文章を作って、教育界の内幕をすっぱ抜き、自分自身に弁明した。24日、魯迅を訪問し、折には、魯迅は教育総長章士釗からの圧迫に反撃を加えているところである。

11月、武昌師範大学教授の職を辞め、上海に戻って、郭沫若と一緒に創造社出版部を創立する準備の仕事をする。

本月、病気のため、杭州及び富陽へ休養に行った。

本年、長女郁潔民が生まれる。

本年、詞を二首作ったが、小説を二篇作成。文学評論は六篇發表。隨筆及び通信を各一篇作った。

1926年（丙寅 民国15年） 30歳

1月、「小説論」を書いて、上海光華書局により出版される。

2月初め、体の調子がいい方向に向かったので、杭州から上海へ、『創造月刊』を『創造』季刊の継続とすることに関して、郭沫若らと協議する。21日、『創造月刊』の発刊の詞』を作った。本月、創造社北京支社が設立。郭沫若が広東大学（後に中山大学）文系院長として招聘されたので、郭と共に南下した。

3月1日、隨筆「小説論及びその他」を作成した。文中に文人の養成には天賦と根性があるゆえ、当時の中国社会は自分の「墮落」に責任を負うべしと、言明した。16日、故郷に帰って療養した事を題材に、小説「煙影」を書いた。18日、郭沫若の推薦を得て、広東大学の文系教授になった。23日、広州に到着。28日、広東大学の出版部主任を兼任しているので、「広東大学の小シリーズ」の出版を計画する。

4月12日、北京の生活を回顧し、散文「南行雜記」を書く。

6月初め、長男が病気になった電報を受けて、広州を立ち、北京に赴く。14日、上海を経

由するとき、「『達夫全集』自序」を作成。19日、天津より北京に入るが、長男はすでに14日に夭折した。年はわずが4歳である。

7月31日、魯迅は厦門大学の教授として招聘されたことを聞いて、魯迅を訪問し、別れを告げた。

本月、論著『文芸論集』が上海光華書局により出版された。

9月、創造社の出版部第1回理事会が広州支社で行われる。欠席のままで本部の理事と編纂委員に推薦された。下旬、妻と子供を連れて借家を立って、長兄の家に引っ越し、一緒に住むようになる。

10月初め、北京を離れ南方へ戻る。5日、上海に滞在し、ホテルで散文「一人途中にて」を書いて、長男の死を悼む。20日、汕頭を経由して広州に到着。

11月3日、「勞生日記」(30日まで)を創作しはじめながら、小説「迷羊」を作成。21日、広州にいる創造社のメンバーが政務に夢中し、上海の創造社出版部を整頓するには人手が必要となるので、協議により推挙され、上海に戻ってその任務に当る。30日、広州政局の腐敗に不満もあることと、上海へ戻る使命感に燃えることがあって、正式に戴季陶に中山大学の教授及び出版部主任の辞表を提出した。著作と翻訳をして、生計を立てようとする。

12月1日、「病閑日記」(14日まで)を創作。17日、広州を離れる。27日、上海に到着。

本年、次男郁天民が生まれる。

本年、詩が二首、詞が一首ある。小説は六篇(中に一篇は未完)、散文は二篇、文学評論は一篇、随筆は二篇創作した。

1927年(丁卯 民国16年) 31歳

1月1日、「村居日記」(31日まで)を創作し始め、2日、創造社出版部の会計を監査した後、事務を引き受けた。また、『創造月刊』、『洪水』半月刊と『新消息』週刊の編集長を担当した。6-7日政治評論「広州事情」を書いて、政府当局を大いに非難した。10日、小説「過去」を作成。14日、孫百剛の家で王映霞と知り合い、その後、親密に付き合う。16日、「広州事情」を「曰歸」というペンネームで発表。17日、文学評論「プロタリア制裁とプロタリア文学」を書く。18日、小説「物寂しい午後」を創作。

2月1日、「窮冬日記」(16日まで)。12日、「広州事情」が「傾向があまりにも悪い」と、郭沫若からの非難に対して、「彼(郭沫若)はおそらく右派に丸め込まれたであろう。それでは我が二人は仲が悪くなり、別々の道を歩むに違いない」と日記に書いた。17日、創造社を整頓しているところ、何人が公金を横領したことが見つかった。本日、「新生日記」(4月2日まで)を作成。

3月1日、王映霞と正式に婚約。17日、政治評論「浙江の教育当局に告げる」を書いて、腐敗を非難する。27日、夕飯の後、労働者の後について、デモ行進に出た。28日、当局が東南大学の学長職を引き受ける意を婉曲に断わった。29日、呉稚暉が東南大学の学長に起

用されたことを新聞から知った。「今の社会では、小さな政客のようないないものが多くて、彼らは、恐らく恥じと気骨がすでに無くなった教育家であろう」。大学を役所のように扱って、民族心は「すでに消えてしまった」、現在の革命とは、「夕日の照り返しのような一瞬の輝く」に過ぎないと感嘆した。

4月1日、「持病が再発し、しばらく故郷に帰って療養する」の掲示を出して、『洪水』及び『新週刊』の編纂事務をしばらく王独清にまかせた。2日、「閑情日記」(31日まで)を創作し始める。8日、政治評論「方法転換における途中」および『鴨緑江上』の読后感想文を作成した。11日、日本記者の公開状に返事を出すため、「公開状 - 日本山口君に答える」を作った。この日の夜、出版部の仕事を人に頼んで、翌日杭州へ病気治療に行くことを決めた。12日、出かけるところ、労働者ピケ隊と軍隊との戦いに遭い、見張りの兵士に阻止され、出られなかった。13日、船で上海を立った。14日、杭州に到着。その後、王映霞の家を訪ね、王の母親と母方の祖父王二南の熱烈な歓迎を受け、会談が弾んだ。18日、王映霞の母親に婚約のことを相談し、事前に王二南の説得もあって、話は順調に進めた。20日、上海に戻って、引き続き創造社の事務や出版部の仕事などを引き受ける。25日から、体の不調を訴え、大変な病気になると予感する。28日、日本の同業者を訪ね、「日本プロレタリア文芸界の皆様へ訴える」を書いた。30日、創造社出版部の重大な事務について第2回出版部の会議を開く。

本月、何畏が書いた「中国文学者が英国知識階級及び一般民衆への宣言」に署名した。魯迅が率先して署名した。

5月1日、「五月日記」(31日まで)を創作。28日、嘉興に行き、王映霞を連れて、杭州へ療養に赴く。31日、上海からの手紙により、当局は29日、創造社出版部を捜査し、職員数人を逮捕した。そして杭州の住所も調べられたことが分かった。

6月1日、『達夫全集』第1巻『寒灰集』が上海創造社出版部により出版された。この日、「客杭日記」(24日まで)を創作し始める。5日、杭州聚豊園で親友を呼んで、王映霞との結婚式を正式に挙げる。10日、本妻孫荃に手紙を出し、王映霞と結婚したことを報告する。14日、随筆「日記文学」を作成。25日、杭州を去り、嘉興に行き、王映霞と一緒に上海に戻り、出版部の仕事に戻る。この日、「厭炎日記」(7月31日まで)を創作し始める。

7月12日、鄭伯奇らと共に、中国を訪問している日本の作家佐藤春夫に会見した。この日、長兄及び本妻孫荃からの手紙を受けた。長兄からの手紙には王との結婚を非難した。しばらくしたら北京へ行くと、孫荃にすぐ返事を出した。15日、1926年11月広州での生活を記録した「勞生日記」を発表。20日、小説「試験」、「微雪の朝」を発表し、大きな反響を呼んだ。30日、最終回として、現代評論社の会議に出席したが、そのメンバーらが「新たな官吏階級ばかり」なので、離脱を決定。この日、妻孫荃からの手紙を受けて、憂くてかわいそうだと感じ取り、人生には意味がないと思い始める。31日、創造社出版部の計画を整理し、出版部の仕事を他の人にたのんで、2週間後北京に行くことを決めた。

8月1日、「『鶏肋集』題辞」を作成。14日、「日記九種あとがき」を書く。15日、創造社を退社する声明を『申報』、『民国日報』に載せる。31日、「五六年来創作生活的回顧」を創作。

本月、評論集『文学概論』が上海商務印書館によって出版された。9月1日、日記集『日記九種』は上海北新書局より刊行される。2日、「民衆発刊詞」及び政治評論「誰は我們的同伴者」を作成。15日、魯迅が「扣絲雜感」を書いて郁達夫を攻撃する人を批判した。22日、魯迅が再度公式に郁達夫を支持する意を表すため、「どの様に書く「夜記の一つ」」を書いた。23日、「『奇零集』題辞」を作成。

10月5日夜、10月3日に広州から上海に移住した魯迅を歓迎するため、北新書局の李小峰が主催した宴会に出席した。6日、昼、魯迅、許広平夫婦を招待。この日、政治評論「人權運動」を作成。20日、魯迅と共に「王氏中国済難会メンバーの晩餐会」に出席した。その後、しばらくして魯迅と一緒にこの組織に加入。この日、『達夫全集』第1巻『鶏肋集』が上海創造社出版部により出版された。

11月1日、『北新半月刊』で小説「迷羊」(翌年1月16日まで)を連載する。5回の連載であった(未完)。7日、小説「二詩人」を作成して暗に王独清を攻撃していることを鄭伯奇が指摘する。15日、『達夫全集』第3巻『過去集』は上海開明書店により出版される。

本月、魯迅、鄭伯奇、蔣光慈と相談し、協力しあって『創造週刊』を復刊する。

12月9日、「『迷羊』あとがき」を作成。

本年、孫荃との間、次女郁正民が生まれる。

本年、詩は二、詞は一、小説は六篇、散文は二篇、文学評論、隨筆、政治評論など二十一篇、翻訳は八篇発表された。『達夫全集』1 - 3巻、著述、日記集各一冊を出版。

1928年(戊辰 民国17年) 32歳

1月4日、文学評論「ルソーの思想及びその創作」、「『敝帚集』題辞」を執筆。10日、小説『迷羊』単行本は上海北新書局により出版された。16日、「ルソー伝」を発表する。28日、「『達夫代表作』自序」を作った。

本月、王映霞と一緒に上海哈同路厚南里880番地に引越した。

2月14日、「翻訳の説明こそが答弁」を書いて、梁実秋からの非難に反駁する。

3月1日、『達夫全集』第4巻『奇零集』は上海開明書店により出版される。5日、小説「街頭に到る」(後、小説「二詩人」に編入統合される)を創作。10日、辛克莱の文芸評論集『拜金芸術』を翻訳し始め、第1章を翻訳し終わる。15日、『達夫代表作』は太陽社に所属されている上海春野書店により出版された。錢杏邨はその「あとがき」を書いて、全面的に取り上げて評論した。郁達夫はすべての印税を太陽社の経費として寄贈した。まもなく、当局は「あとがき」の内容が妥当ではない理由で発禁にした。

4月1日、『北新半月刊』で『拜金芸術』の訳文を連載し始める。14日、隨筆「ルソーに関

する」を書いて、再び梁実秋の悪企みを非難した。15日『達夫全集』第5巻『漱帚集』は上海北新書局により出版される。

5月9日、ツルゲーネフの「ハムレットとドンキホーテ」を訳して、原稿を魯迅に提出した。

6月1日、「通信 - Max Stimerに関する」を書いた。20日、魯迅と共同編集の『奔流月刊』を創刊した。

夏、上海赫徳路嘉禾里1476号に転居。

8月1日、反論として、随筆「社会に対する態度」を書いて、再度創造社を離退した理由を説明し、魯迅の弁護をした。8日、「革命広告」を書いて、魯迅と自分に関するデマに反駁した。

本月、散文『灯蛾埋葬之夜』を書く。

本月中旬、当局の悪意に警戒し、しばらく呉淞に避難した。

9月20日、夏莱締と共に編集した『大衆文芸』を創刊。

本月、小説「孟蘭盆会」、「逃走」を作成。

10月、随筆「故事」を書いて、暗に現実を指して批判する。

本月、国民党浙江省党務指導委員会から月刊誌『語糸』を取り締まる命令が出された。

11月、本月中旬、当局が逮捕するデマを広くながし、上海を立ち、蘇州、無錫、揚州などに転々し避難していた。途中散文「感傷的な旅」を書いた。本月、「揚州の思いで - 姜白石の「小紅は低唱し、私はふえを吹く」の韵」を作った。

12月6日、上海に戻る。

本年、王映霞との間、長男郁飛が生まれる。

本年、詩を三首作った。小説、散文を二篇発表し、文学評論、随筆十二篇、翻訳（詩）は八篇（その中、『拝金芸術』は10回に分けて連載）作成。『達夫全集』第4巻、第5巻、小説散文集と小説の単行本はそれぞれ一冊出版。

1929年（己巳 民国18年） 33歳

1月10日、『創造月刊』は2巻18号で終止符を打つ。本月、小説「在寒風里」を創作。

2月7日、創造社の出版部は当局に閉鎖された。21日、史濟行に返信を出して、田舎に住んでいるので、創造社が閉鎖されたことを知らなかったと書いた。

4月1日、編集長を担当していた『大衆文芸』は、2巻1号から陶晶孫にゆずった。本日、陶晶孫と共に魯迅を訪ね、陶晶孫を魯迅に紹介した。12日、史濟行へ手紙をだして、小説「迷羊」は映画化される計画はない。その内容は簡単すぎるからと。

本月、随筆「馬蜂的毒刺」を創作。

6月30日、小説散文の合併集『在寒風里』は廈門世界文芸書社により出版される。

7月23日、王映霞に意地を張って、寧波へ行った。25日、電報で王映霞を呼んで普陀を遊

覧する。同行しているのは王魯彦、史濟行らである。30日、上海に戻る。本月、『拜金芸術』第19章までを翻訳。これで、全書の翻訳は完成した。

8月上旬、暫く杭州に滞在。23日、北新書局が長期に渡って、魯迅の巨額な原稿料の未払いや『奔流』の作者の原稿料の未支払いを理由に、魯迅は『奔流』の編集を停止させ、訴訟の準備をすすめる。そのゆえ、李小峰の電報要請に応じ、杭州から上海に戻って、双方の調停に入った。25日、魯迅や李小峰らと一緒に弁護士事務所へ相談交渉に行き、最終の協議を達成して、暫くのうちに訴訟を提出しないように合意した。28日、魯迅と一緒に李小峰の招待を受け、宴会に出席、そして魯迅と林語堂との間の争いを調停した。

9月初め、杭州へ赴く。8日、北新書局と魯迅との間に印税のことにに関して、衝突したので、再び上海に呼び戻され仲裁に立つ。19日、周作人に手紙を出す。27日、安徽大学の招聘を受け、教員として安慶へ赴く。

10月6日、当局が学長劉文典を免職したことに不満を表したため、省教育厅長にブラックリストに入れられ、幸いに友人がはやく知らせてくれて、安慶を立つことができた。

本月、『達夫代表作』改訂版自序を作った。

12月、北新書局が経営をあきらめたので、魯迅と共同編集した『奔流』は2巻5号で休刊した。

本年、王映霞との間、長女静子が生まれたが、まもなく、養子として田舎の人にあげた。

本年、創作は詩は四首、小説は一篇、随筆は三篇、手紙は七通、訳文は十三篇（その中、『拜金芸術』は9章まで刊行）などある。

1930年（庚午 民国19年） 34歳

1月20日、元の序文と錢杏邨が作った「あとがき」を削除した『達夫代表作』は上海現代書局により出版される。

2月10日、上海を立ちしばらく杭州や富陽に滞在した。13日、魯迅と一緒に発起人として、「中国自由運動大同盟宣言」に署名した。その後、魯迅と同行して大学で講演し、当局の文学への圧力、言論統制、出版自由の制限を批判する。17日、杭州から上海に戻る。20日、北京大学から教員として招聘する催促の電報を受けた。

本月、翻訳の小説集『小家之伍』に「訳者あとがき」を書き、その中に、自分は官僚やリーダーになりたくない時代おくれ者だと弁明した。

3月2日、魯迅の指議で、当日成立された中国左翼作家連盟の発起人の一人になった。7日、5月末北京大学に赴任すると、馬幼漁に返事した。17日、周作人に手紙を出し、内容は病気で即時北京に行けないことを知らせる。19日、「自由大同盟」の発起人として、活動にも参加したことを理由に、国民党浙江省党本部に「墮落した文人」のブラックリストに入れられた。そして、党本部の責任者許紹棣、葉潮中らが連名で中央当局に指名手配の要請を出してもらった。指名手配の名簿に魯迅などの人も含まれる。その故、上海を離れ、富陽へ避難

する。

本月、去年、陶晶孫が編集担当を引き受けた『大衆文芸』は当局に閉鎖された。

4月1日、翻訳小説集『小家之伍』が上海北新書局により出版される。中旬、上海に戻る。

5月1日、上海で行った詐欺事件についてのこと、『北新半月刊』に「声明文」を掲載。21日、周作人へ手紙を出す。

本月、赫徳路嘉禾李1143号に転居。

6月17 - 19日、『申報』の広告欄に声明文を出し、史濟行が小説原稿「没落」を盗み取って、自分の名で発表した悪事を暴き立てた。23日、周作人に手紙を出す。

7月初め、杭州西湖覚園にしばらく滞在、創作に専念。

本月、小説「紙幣の躍り」を創作。

8月、小説「楊梅焼酒」を創作。

9月中旬、杭州を離れ、上海に戻る。

10月1日、小説「十三夜」を発表。

11月、『『薇蕨集』序』を書いて、国民を食い物にし、意見の違うものを殺す政府当局を批判する。この文章は検閲に出すときに差し押さえられた。6日、ルソー「ある孤独漫歩者の沈思（第一漫歩）」を翻訳。

本月、「左聯」の責任者に手紙をだして、自分は小資産階級の人なので、びらを撒くなどのような具体的な仕事をするには相応しくないの、強制されたら、他人にも自分にも申し訳ないので、除名を要請した。と書いた。それで、「左聯」のある指導者は16日に開かれた第4回全体大会で、『全て投機及び反動者を一掃する - その場で郁達夫を除名する議決をした。その時馮雪峰、柔石ら4人だけ、反対票を投じた。後、魯迅が郁達夫を「左聯」に除名されたことを知り不満をもらした。

12月、当局の指示に従って「題辞」を削除して、『達夫全集』第6巻『薇蕨集』は上海北新書局に出版する許可を得た。

本年、詩はなし。小説は三篇、論文は一篇、翻訳は二篇、随筆は五篇発表。『達夫全集』第6巻、小説散文合併集、翻訳小説集など各一冊出版。

1931年（辛未 民国20年） 35歳

1月17日、「左聯」の青年作家が5名、及び元創造社後期のメンバー李初梨が相次いで逮捕された。

本月、逮捕された作家を救出するため、奔走したので、当局に警告がされて、杭州や富陽などへ避難する。魯迅は家族を連れて旅館へ避難して、危険を回避する。

2月7日、当局は上海龍華警備司令部で「左聯」のメンバー柔石、馮鏗ら青年作家5名を処刑した。

3月31日、ひそかに上海に戻った。



7月6日、周作人に手紙を出す。

9月、「九・一八」事変に関して「軍閥の陰謀、意見の違うものを殺す政策」を発表。

11月、上海を離れ、しばらく北京に滞在。

12月11日、散文「志摩は思いでの中にて」を作成。20日、散文「懺悔独白」を発表。

本月、胡愈之などの人の提議で作られた「上海文化界反帝抗日大連盟」に加入し、機関誌の編集に参加した。

本年、王映霞との間、次男郁雲が生まれる。

本年、詩は五首創作したが、小説の創作はなし。散文は二篇発表。翻訳は三篇、文学評論、政治評論は四篇発表。

1932年（壬申 民国21年） 36歳

1月4日、「豈有文章伝海内、欲将沈醉換悲涼（どうして文章を国内に伝えることができるだろうか、酔っ払いを以って悲愁と換えろうと思う）」対聯を作った。

7日、上海暨南大学のお招きで「文学漫談」という講演を行った。

本月、王映霞との間、紛争が相次いだので、調停により、一部の著作権及びその収益を王に贈ることを約束した。

2月3日、「一・二八」日本軍が上海を占拠し、魯迅と周建人が憲兵に殴打され、行方不明の噂が広がり、『申報』に臨時欄に人を捜す告示を掲載した。4日、内山書店支店へ行って、そこに避難している魯迅を訪問する。8日、戈公振らと中国作家抗日会を作って、会員になった。

本月、魯迅、茅盾などと連名で「上海文芸界が世界に告げる書」を発表し、日本帝国主義の侵略行為を非難した。

3月、小説「她是一個弱女子」を完成し、「あとがき」をつける。

春季、「避席畏聞文字獄、著書都為稻梁謀」の龔自珍の詩を自筆で書いた掛け軸を寝室にかける。呉淞中国公学で講義をし始める。

4月11日、「絶交流俗因耽懶、出売文章為買書」（流俗と絶交するのは怠けの障害で、文章を売るのは本を買うため）の対聯を作る。16日、「羅佩脱・孝脱義士を悼む」を発表し、当局の売国政策を非難した。20日、小説『她是一個弱女子』の単行本は上海湖風書局により出版される。2ヶ月のうちに、当局に「プロ文芸」という名で本を発禁され、書局が閉鎖された。

6月、小説「馬纓花が開く時」と随筆「黄仲則に関して」を作成。

7月10日、柳亜子らと連名で南京政府へ電報を打ち、牛蘭夫婦を釈放するのを要請する。

8月、散文「釣り台の春昼」を作成。

9月16日、林語堂が編集長を担当した『論語』が創刊される。初回の編集会議に出席し、フリーの寄稿者になった。

本月、小説「東梓関」を創作。また随筆「天涼好個秋」を書いて、政局を風刺する。

10月6日、持病の肺病が再発、杭州へ療養に行く。「滄洲日記」(13日まで)を創作し始める。8日、「杭州の南高い峰に登る」詩を作り、王映霞を妾婦朝雲に喩えた。14日、西湖医院水明楼に移し、「水明楼日記」(11月10日まで)を書き始める。20日、小説「遅桂花」を創作。31日、小説「碧浪湖的秋夜」を創作。

11月中旬、上海に戻る。

12月22日、黎烈文が編集を引き受けた『申報 自由談』に文章を発表し始める。30日、魯迅を訪問し、『自由談』に投稿するよう黎烈文からの伝言を伝えた。

本月、小説『她是一個弱女子』は上海現代書局に出版されたが、即時当局に発禁された。

本年、詩は六首、小説は六篇創作したが、四篇は発表。散文は一篇発表。文学評論、随筆は十二篇、単行本小説は一冊出版。

1933年(癸酉 民国22年) 37歳

1月、宋慶齡、蔡元培、楊杏仏、魯迅などで発足した中国民権保障同盟上海支会に加入した。その後、『我不是一个战士，只不過是一个作家(僕は戦士ではなく、ただの作家にすぎない)』とアメリカの記者スモドレーに話した。

2月、小説散文合併集『懺余集』は上海天馬書店に出版された。

3月、「小林が殺されたため、日本警察庁への檄文」を書いて、日本共産党作家小林多喜二を殺した日本軍政府当局へ抗議した。

本月、『達夫自選集』は上海天馬書店に出版された。その原稿料は出版経費として「左聯」に寄付した。

4月25日、王映霞の意志と粘り強い主張の下、一家を挙げて杭州に転居。大学路浙江省図書館付近にある場官弄63号を住居とした。

5月4 - 6日、散文「転居瑣記」を発表。5日「詐欺を説く」を創作。中旬、杭州を立ち、上海へ赴く。14日、逮捕された丁玲などを救出するために奔走。15日、「不慮の死になった小林の遺族への募金告示」を筆頭に名を連ねて発表した。18日、上海を離れ杭州に帰宅。20日、小説「遅暮」を作成。23日、当局が作家丁玲等を逮捕することで、蔡元培、楊杏仏などと連名で南京政府への抗議電報を打った。

本月、インタビューを受け、自ら「左聯」の名簿から名前を取り消したと話した。

6月18日、詩を作って、当局に暗殺された民権保障同盟総幹事の楊杏仏を悼む。23日、随筆「清談の由来」を作成。

8月21日、「文学社」の要請に応じて、魯迅と同社との紛争を調停するために、上海に赴く。

本月、『達夫全集』第7巻『断残集』は上海北新書局に出版される。

11月3日、杭州鉄路局の要請に応じ、関係者と浙東名勝を、半月で遊覧した。30日、魯迅

は補壁の要請に応じ、王映霞に「郁達夫の杭州への転居を阻む」という七言律詩を作った。12月、小説単行本『她是一個弱女子』は当局の命令で、添削し、題名を『饶了她』に変えて、上海現代書局より出版された。

本年、王映霞との間、三男郁亮が生まれる。

本年、詩が大幅に増え、十七首（詞は一首）ある。小説は三篇、散文は四篇、旅行記は七篇、文学評論は五篇、随筆は四十四篇以上発表。『達夫全集』第7巻、作品集は二冊、小説単行本は（添削、題名変更）一冊出版。

1934年（甲戌 民国23年） 38歳

3月29日、東南五省交通周覧会の招きに応じ、関係役員の案内の下で林語堂らと浙西、滬東の名勝を、一週間で観光した。

本月、散文「杭州」（杭州 - 地方印象記）を作成。現地の人文や風俗習慣を多く紹介した。

本月、翻訳集『何人が偉大な作家』は上海中華書局より出版された。

6月、散文旅行記集『屐屐处处』は上海現代書局より出版された。

7月6日、汪静之らの招きに応じ、王映霞及び長男を連れて杭州、上海を經由して、青島へ避暑観光に出かけた。この日、「避暑地日記」（8月14日まで）を創作し始めた。13日、青島に到着。16日、暑休みのスケジュールを作って、創作危機が来ると予感し、準備に着手。8月14日、青島から済南を経て北京に到着。15日、「故都日記」（9月10日まで）を創作。本日、散文「故都の秋」を作った。26日、三男耀春が危篤なので、王映霞に長男を連れてもらって先に杭州へ帰郷させた。

9月9日、杭州に帰着。

本月、母校OBの要請に応じ、1学期、月に3回の講義で、杭州之江大学の文学評論の教授を兼任した。

10月、蘇雪林が泣きながら当局に郁達夫の著作を発禁にすべき請願書を提出したことに対して、『自伝』の序文「いわゆる自伝なり者」を作成した。

12月、王映霞は将来のことを考え、孫百剛に助けてもらって、住居の左側にある土地を購入、前後2軒の住宅（独立か行ききできるかの住宅）を立てようと思う。

本年、小説単行本『她是一個弱女子』（後に「饶了她」）は当局に「政府を非難する」という罪名で3回も発禁にされた。

本年、小説の作成はなし。詩は二十八首（詞一首含め。「自伝」の一部分を含む散文は四篇、旅行記は十篇、随筆は十九篇、文学評論、政治評論は各一篇を発表。翻訳集、散文旅行記集は各一冊を出版。

1935年（乙亥 民国24年） 39歳

1月、上海良友図書会社の要請に応じ、『中国新文学大系散文二集』の編集を担当し、その

集の「まえがき」を書く。

2月4日、散文「寂しい春潮」を書いて、目下の中国は南宋時代のようなだと思っている。

本月、小説「唯命論者」を書いて、暗に家庭生活を指す。

3月17日、隨筆「惜掌之歌」を作成。28日、昨年、11月1日に、「杭州 - 地方印象記」という文章を発表してから地元の人からの不満を買い、批判の手紙が多く寄せられたので、わざわざこの「杭州人を説く」を書いて、敬意を持って弁解した。

4月、『(中国新文学大系 散文二冊)まえがき』を作成。

5月8日、散文「町にある呉山」を作成。20日、王映霞との間できた三男郁亮が夭折した。わずか2歳である。

本月、『達夫が翻訳した短篇集』は上海生活書店より出版される。

6月、「われわれは文化に関する意見」に署名した。この「われわれは文化に関する意見」は当局がお経を読み、旧い政策にもどすことに反対するものである。

7月11日、鄭振鐸の要請に応じ、上海暨南大学院日本史の教授として、大学側が内定したが、教育部に報告したところ却下された。

本月、『達夫日記集』は上海北新書局より出版される。

9月1日、「秋霖日記」を(20日まで)創作し始める。13日、杭州作家協会第2回理事会常務理事に選ばれた。18日、隨筆「中国は災難の国」を作成。20日、妻王映霞と次男を連れて、富陽にいる母親の70歳誕生祝いにかけつけた。

秋、新居を立て始めたが、債務が多くあり、それに妻王映霞は浙江省教育庁庁長許紹隸との往来は親密しすぎて、夫婦喧嘩が相次いで、浙江省政府委員葛敬恩の斡旋を受け、福建省政府主席陳儀に連絡を取り、南へ仕事に出る意思を示した。

10月、『達夫短篇小説集』は上海北新書局より出版される。

11月1日、小説「出奔」を発表。これは小説の創作としては最後の作品である。

この年、詩は三十一首(詞は一首)。小説は二篇、自伝を(6章)含む散文は二十二篇、隨筆は二十四篇、旅行記は七篇、文学評論は七篇、翻訳は一篇発表。翻訳集、日記集、小説集(上下冊)などは各一冊出版。

1936年(丙子 民国25年) 40歳

1月10日、散文「風雨茅廬」を創作。15日、福建省へ観光に来ないかの福建省政府主席陳儀からの招待状をうけた。

本月、蒋介石と一緒に、杭州にきた秘書、秘書室主任並びに特務主管戴笠と深交していた。

2月2日、杭州を離れ福建に赴く。本日、「閩游日記」(3月31日まで)。6日、陳儀をたずねる。面接を受けた後、「経済設計」に関することをやっってもらおうと決定した。7日、正式に政府の参議として任命され、月給は300元である。

春、杭州に転居してから、妻王映霞は有名な作家の妻という身分で、また、自分が昔「杭州

の四大美女」の名を借りて、積極的に交際をひろげ、権力者と交友する中で、許紹隸との関係が親密し過ぎたことで、夫婦間に亀裂ができた。その事実を明らかにするため、自分の真実な気持ちを記述する詩「家を壊す詩紀」を作り始めた。

3月、『達夫旅行記』は上海文学創造社より出版される。

4月1日、「濃春日記」(20日まで)を創作し始める。2日、王映霞に手紙を出して、現地政府の財政が困難なので、月給は全額支払ってもらえないし、福建省に来てから収入はわずか100元あまりで費用は5倍もかかると書いた。30日、杭州にある新居「風雨茅廬」は王映霞の努力の下で立派に建てられた。ついに、福建をはなれ、杭州へ休暇に帰った。途中、上海を經由する時、魯迅を訪問。

5月30日、散文集『閑書』は上海良友図書館出版社より出版されたが、これは生前自分の手で編集した最後の作品集になる。

6月9日、杭州から福州に戻る。12日、福建省政府公報室主任と正式に任命された。

7月5日、6月2日に、杭州で書いた散文「飲食男女が福州にて」を発表。これで、王映霞の不満を買った。

8月16日、「国防文学」について、写実主義、浪漫主義に関する談話を発表した。

本月、魯迅が病で倒れたことを聞いて、わざわざ上海にでむいて、見舞いをした。これは二人の最後の顔合わせである。

9月16日、『論語』雑誌に「家」の特集文章を募集広告を作成。25日、福州格致中学校で「国防統一陣線下の文学」の講演を行った。

10月19日夜、魯迅の死去訃報を聞いて吃驚し、直ちに許広平へ弔問の電報を打った。20日朝、上海へ弔問に出発。22日、上海に到着して、魯迅の遺体に告別して上海万国公墓まで見送った。しかも、魯迅の死についてインタビューを受けた。24日、「魯迅を悼む」を作成。

11月、南京政府が福建省政府に、日本に亡命している郭沫若に帰国してもらう指示を出したので、福建省政府主席陳儀はその任務を郁達夫に任せた。11日、福建省政府が印刷機の購入と講演の理由で、上海を発ち、日本へ出発。29日、『読売新聞』に「今日の中華文学(上)」を発表。

本月、わざと、千葉県川町へ郭沫若を訪問し、昔の友情を語り、一緒に東京で行われた各種類の集合に出席し、談話を発表。しかも、郭沫若と積極的に日本改造社に『大魯迅全集』の出版準備に協力した。集会と講演をするとき、中日双国軍事政策を批判したため、日本の警察に嚴重に監視された。

12月1日、「今日の中華文学」(下)を発表し、高く魯迅を評価した。5日、「中国旧詩の変遷」を講演する予定であったが、警察に禁止された。19日、神戸から日本を発ち、台湾を訪問。30日、廈門に到着。

本年、王映霞との間、三男郁筍が生まれる。

本年、詩は二十首までに減少。散文は（自伝を含む）十篇、隨筆は十篇、旅行記は七篇、翻訳、政治評論は各一篇発表。自選旅行記集、散文日記集は各一冊。本年度より、小説創作は完全に停止。

1937年（丁丑 民国26年） 41歳

1月1日、廈門の新聞紙に政治評論「憂慮すべき1937年」を発表。4日、「大阪毎日新聞」に政治評論「日本与野党とも中国を新たに見なおすべし」（日本語）を発表。本日、福州に到着、出張が終った。

3月1日、「魯迅の偉大さ」（日本語）を発表。これは日本改造社が『大魯迅全集』を出版するために書いたものである。

4月28日、杭州に暫らく滞在。30日、「回程日記」（5月4日まで）を作成。

5月7日、福州に戻る。18日、南京政府が郭沫若の帰国を許可する電報を受け、即時、航空便と普通郵便を各1通出して、郭沫若の帰国を催促。

7月28日、わざと上海へ行って、郭沫若の帰国を迎えた。

8月11日、船で福建省に戻る。13日、日本軍の上海への全面攻撃、「八・一三」戦争が爆発したため、乗っていた船が途中寧波港で降りた。寧波から、曹娥、紹興、杭州、嚴州などを経て、福建の北部から福州に到着。

本月、日本軍が中国全土を侵略し始める。「七・七事件」が爆発したので、王映霞を故郷の富陽へ避難させた。

9月10日、旅行中の見聞「全民抗日の線後」を発表。

10月17日、福州文化界が開いた救亡協会の成立大会及び魯迅の一回忌記念大会に出席し、挨拶をした。「救亡協会」の理事に推薦された。19日、「魯迅逝去一周年」を発表。22日、「救亡協会」の理事長に推薦された。

本月、王映霞は富陽での生活が苦しいことを理由に、浙江金華及び麗水等の地へ避難し、許紹隸と同居する。

11月15日、福州文化界救亡協会が『救亡文芸』の創刊を決定し、編集担当になる。

12月3日、国民党福建省保安処軍統スパイは福州文芸界救亡協会に反党分子がいると指摘し、恐喝してきた。救亡協会を改組しようとする時、郁達夫は、憤慨し「救亡協会」理事を辞し、新聞に協会を離脱した声明文を発表した。5日、『救亡文芸』が休刊。

本月末、武漢に疎開し当地で国民政府軍事委員会政治部を成立した。その下に属した第三庁の責任者郭沫若は郁達夫に電報で対敵宣伝の第七処処長に出馬しようと要請した。

本年、詩は十首までに減った。散文は二篇、隨筆は八篇、政治評論は十五篇発表。

1938年（戊寅 民国27年） 42歳

1月18日、福州で、母親が12月31日に日本軍が富陽に侵攻した時、山に凍死した訃報を受

け、悲しくてたまらない。直ちに家に位牌を安置して、遺影の両側に対聯「无母何依，此仇必報（母をなくして、何に依るか、この仇を必ず討つ）」を書いて掛ける。20日、家のことや国のことで悩んでいた。よく考えた末、郭沫若に、武漢へ赴任することに異議を申し立てた返事を出した。

2月25日、「敵機的来襲 致陶亢徳信（敵の飛行機が来襲 陶亢徳への手紙）」という文章の中に、年取った母の殉難や兄弟妻子の離散、自分がひどく非難されている苦境を書いた。また、国難にあたり、同胞同士が個人の仇ばかりを考えては、全国民の最後の勝利を勝ち取るまで、後何年かかることを指摘した。

3月9日、郭沫若の電報の招きで、福州を経ち、浙江省麗水を経由して、事前に杭州から逃れて、許紹棣の家に身を寄せている王映霞、王の母親及び3人の息子に再会し、南昌、九江を経て武漢へ入って、武昌横街頭に住む。

本月、到着が遅延したため、予定の第七処処長の職はすでに日本に留学していた同級生范寿康に回された。第三庁少将設計委員（第五処処長は田漢である）に任命された。また、中華全国文芸界抗敵協会成立大会に参加し、理事に選ばれた。

4月3日、「文協」の常務理事、研究部主任及び機関刊行物『抗戦文芸』編集委員に選ばれた。14日、他の作家と一緒に政治部及び「文協」を代表して、台児庄、徐州などの軍隊を慰問する。そして、山東省、江蘇省、河南省一帯の黄河防波堤を視察した。

5月8日、視察終了後、武漢へ戻る。9日、「日本の娼婦と文士」を作成した。14日、文芸界知名人連名の「給周作人的一封公开信（周作人への公開状）」の最終稿を作って、サインした。

6月下旬、浙江省東部、安徽省南部の第三戦区を視察したとき、友人の曹聚仁に会い、彼に王映霞と許紹棣とのことを話した。金華で許紹棣に遭遇して、許紹棣が病気を理由に面会を断る。

7月初、東戦場から武漢に戻る。4日、王映霞は友人宅に身を隠した。浙江省政府の要人及び保安処、各専門員のいる役所に7、8通の至急電報を打って、王が誘拐されたことを訴え、捜査依頼を頼んだ。5日、漢口の『大公報』に尋ね人の広告を掲載した。許と王は巨額の現金を持って逃亡していて、居場所を探していると訴えた。この情報は全国に伝わって、みんな啞然とした。友人と同僚たちが調停に乗り込んでいた。9日、友人の調整により、王と話し合い、過去のことを水に流す協議書を結んだ。10日、夫婦としての和解条件の1つは、漢口の『大公報』に謝る記事を掲載することだ。その内容は、前回掲載した記事は自分が神経過敏によることで、誤解を招いた。謹んで遺憾の意を表した。11日、王映霞は家に戻った。

本月、王は家に戻った後、武漢の戦況が緊迫した原因で、第三庁の人が疎開の命令を受け、王、王の母親及び3人の息子を連れて湖南省西部の常德に移った。物価が高いので、日本留学の同級生や安慶にいる同僚易君左の援助を受け、漢寿県の都会部に移った。北門外にある

蔡天培のお酢の店を借りて居住した。二人は仲直りしたが、男女間の恨みはなかなか消えなく、許と王との手紙をコピーし、製本して友人に配った。

8月14日、長文の「回忆鲁迅（鲁迅を思い出す）」（次年度に完成した）を書き始めた。22日、香港の『星島日報』に家族の不和に触れた「国与家（国と家）」という随筆を発表した。同時に、「達夫近作」（又名 杭富沦陷后，姬王氏为友人浙教育厅长某乘危占去，半载复来归，逐避居汉寿，易君左赠诗，有‘富春江上神仙侣’句，感而有作。是为「毁家诗纪」第九 - 十三首。（別名：杭富が陥落後，王は友人の浙江省教育庁長に取られ、半年で家に戻り、漢寿県に隠居し、易君左からの詩、「富春江上神仙侶」の句を読んで作詩）を発表した。9月22日、陳儀の電報招聘に応じて福建省に戻って、軍政計画を話し合った。一人で長沙、南昌、江山、浦城などの地を経て、月末に福州に到着した。

本月、途中に「毁家诗纪」第十四から十九首を作った。筆致が悪く、気分は消沈であった。10月1日、香港『大風』旬刊編集の陸丹林への手紙を書いた。15日、『大風』第23期に「风雨下沅湘遥望汨罗（風雨下の沅湘で遠くから汨羅を眺める）」（又名「九月初旬离汉寿，拟去南洋，风雨下沅湘，遥望汨罗」，即「毁家诗纪」第十四，十六，十八）（別名：「九月初旬漢寿を離れ、南洋に行く予定、風雨下の沅湘で、遠くから汨羅を眺める」すなわち、「毁家诗纪」第十四，十六，十八首）である。

12月18日、シンガポール胡財団所属の『星島日報』の電報招聘で、王映霞と長男郁飛をつれてシンガポールへ、『星島日報』の特別欄の編集者になる。今回のシンガポール行きは2つの目的がある。1つは、念願の南洋の美しい景色を観賞する。もう1つは、夫婦の間でごたごたしたことで、みんなに迷惑をかけた環境から逃げ出すことである。

本月、正式に胡財団の首脳胡文虎，胡文豹兄弟に会見した。

本年、詩を三十五首以上完成した。その中で、「毁家诗纪」の大部分は完成して、別名で発表した。本年、そのほかに、書簡、随筆、政治評論などのものが二十二篇ある。

1939年（己卯 民国28年） 43歳

1月1日から『星島日報』の特別欄『晨星』と夕刊の特別欄『繁星』の編集に携わる。15日、『星洲日報星期日』の『文芸』週刊の編集を受け持つ。17日、別の題名で「毁家诗纪」第五首を発表した。18日、マレーシア、シンガポールの文学青年向けの文芸及び文化について、「几个问题（いくつかの問題）」を書いて、自分の意見を述べた。文章を公表すると、地元の評論家から批判を浴びた。25日、「我们对你们却没有失望（私は貴方たちには失望していない）」という文章を発表して、批判者に反論した。27日、さらに、「我们对你们还是不失望（私はやはり貴方たちには失望しない）」という文章を発表し、改めて自分の意見を主張した。

2月5日から、正式に『星洲日報』の『文芸』隔週刊の編集を受け持つ。20日、「毁家诗纪」を香港の『大風』旬刊に送り、編集の陸丹林への手紙には、雑誌が10冊ほしい。それ



以外、原稿料は要らない。しかし、特に「この号の雑誌は蒋介石、叶楚倫、于右任、邵力子及び柳亜子などの軍、政府要人に1冊ずつ送付する」と声明文を掲載した。

3月5日、「毀家詩紀」は『大風』創刊1周年特大号に掲載された。再び国内外の世論に反響を巻き起こした。「千古名文、一時絶唱（千古の名文、一時の絶唱）」と評価された。しかし、家の崩壊はこのときから始まった。17日と18日、王映霞は次々と『大風』旬刊編集の陸丹林に手紙を出した。「披着人皮的走兽（人の皮を被っている獣）」、「兽心易变（獣の心が変わりやすい）」と、郁達夫を批判した。

本月、王映霞は驚きと怒りの中で、家を出て友人宅に身を寄せたが、社交の場合、郁達夫とは夫婦だと対応していた。

4月15日、王映霞は『大風』第34期に「一封长信的开始 - 谨读 大风 卅期以后的呼声，鸣冤叫屈（一通の長い手紙の始まり - 謹んで『大風』第30期を読んでからの叫び声）」と、無実の罪を訴えた。

5月5日、王映霞は『大風』第36期に「请看事实 - 到星架坡的经过（事実を見なさい - シンガポールに来る経緯）」という文章を掲載して、引き続き「毀家詩紀」に反論した。この号の『大風』は、去年（8月22日）、郁達夫が香港の『星島日報』に掲載した「国与家（国と家）」を転載した。29日から、マレーシア、シンガポールの友人たちが郁達夫と王映霞との紛争調停に乗り出した。そして、新聞に和解詩を七首発表したが、まったく効果はなかった。

6月1日から、『星島日報 半月刊』の『星洲文芸』の特別欄及び『星光画報』の『文芸』コラムの編集を受け持つ。28日、『星島日報 晨星』に中華全国文芸界抗敵協会が署名した200元寄付の領収書を掲載し、そして、郁達夫にこの募金に尽力したことを感謝した。

7月、政治評論の文章をいくつか発表した。また、「回忆鲁迅（鲁迅を思い出す）」を完成した。

9月27日、抗日宣伝のためマレーシアに来た武漢合唱団「野原」の開幕式の司会をするため、王映霞を連れてクアラ Lumpur に渡った。30日、シンガポールに戻った。

11月23日、長兄郁達華は民族利益の維持と司法の尊厳を守るため、上海自宅の前で、日本のスパイに暗殺された。

本年の詩は激減して、十一首であった。散文は八篇、訳文は一篇、政治評論、文学評論、隨筆など八十篇以上発表した。

1940年（庚辰 民国29年） 44歳

2月1日、『星島日報 晨星』に許広平の手紙を掲載した。その内容は、郁達夫に感謝の意を表していると同時に、シンガポールの2つの団体から鲁迅の親族への援助金が届いたのを知らせたものである。9日、『晨星』に老舎をはじめとする中華全国文芸界抗敵協会が署名した4万元寄付の領収書を掲載し、そして、郁達夫にこの募金に尽力したことを感謝した。

3月、王映霞と協議離婚に同意し、新聞に声明文を掲載した。

本月、上海各界で公式に郁曼陀烈士を祭り、追悼大会に死者を悼む対句を書いた。天壤薄王郎，节见穷时，各有清名扬海内；乾坤扶正气，神伤雨夜，好凭血债索辽东。

4月7日、『星島日報 星期刊』の『教育』週刊の編集を受け持つ。

5月、王映霞はシンガポールを離れて帰国した。そのため、七言律詩を三首作って記念した。また、月末に「すでに3月に王と離婚し、これから、王とはまったく無関係で、諸親戚や友人には一々お知らせしないが、お許しください」という告示を発表した。

6月5日、王映霞は重慶の『中央日報』に再び離婚の記事を掲載した。

本月、日本の文芸評論家新居格へ「敌我之间（敵と我との間）」の公開状を発表した。林語堂へ「嘉陵江伤传书（嘉陵江上の文通）」を出した。

8月、『星島日報』の編集長関楚璞が辞職して香港に戻ったため、編集長の代行をして社説を書いた（10月下旬俞頌華が赴任するまで）。

本年、詩は約三十首発表した。散文、旅行記はそれぞれ一篇ずつ、隨筆、文学評論、政治評論はあわせて五十六篇以上ある。

1941年（庚辰 民国30年） 45歳

1月、シンガポールのイギリス政府情報部（即ち宣伝部）中国籍職員李小瑛（李筱瑛とも言う）と知り合いになる。

2月、『星島日報』同人旅行団団長となり、マレーシア北部の名所旧跡を旅行した。

3月、中心として「星马文艺工作者致侨胞书 - 反利投降妥协坚持团结抗战（シンガポール、マレーシア文芸工作者が華僑向けの公開状 - 投降、妥協に反対し、団結反戦を堅持する）」という文章を発表した。

4月、李小瑛の推薦を受け、シンガポールのイギリス政府情報部が出版している『華僑週刊』の編集長になる。

7月、「郭外长经星小叙记（郭外交部長がシンガポールを經由した記録）」及び隨筆、詩などを発表した。「中国文化界がソ連科学院会員向けの公開状」にサインした。

8月上旬、『星島日報』の編集長俞頌華が帰国したため、9月下旬蕃公弼が着任するまで、再度編集長の代行をして社説を書いた。30日、林語堂の長編小説『瞬息京華』（英語版）を中国語に翻訳し、『華僑週刊』に掲載し始めたが、未完のままである。

12月8日、中心として「星華文芸工作がマレーシアを守るため華僑同胞に告げる書」を発表した。17日、華僑同胞のリーダー陳嘉庚が組織したシンガポール抗敵委員会成立大会に出席し、団長に推薦された。胡愈之、王任叔等と共同で大会宣言を作成した。後、当団所属の戦時青年幹部訓練班主任を兼任し、会員に日本問題を講演するのを担当する。30日、シンガポール文芸界連合会議に出席して、文芸界抗敵委員会執行委員に就任し、後に当会の文芸組の責任者になった。

本月、太平洋戦争勃発、日本軍がシンガポールに上陸し、英国軍情報部門が撤退することに従いシンガポールを離れる李小瑛と別れを告げる。

本年、詩は三十首、詞は一首、随筆は十三篇、政治評論、訳文はそれぞれ二篇発表した。

1942年（庚辰 民国31年） 46歳

1月6日、星華文化界抗敵連合会成立大会に出席し、理事、常務理事、主席に選ばれた。30日、日本軍がシンガポールの向かいにある島を侵攻したため、長男郁飛を中国に帰国させる段取りをし、そして、当時すでに重慶行政院の秘書長を担任している長官陳儀に御願いした。

本月、抗日活動を宣伝することとイギリス植民地当局と交渉することに奔走した。そして、家を借りて食品を貯蔵して、長期戦に備える。

2月3日、抗日委員会の会議を司会し、イギリス植民地当局及び国民党政府のシンガポール駐在領事館が華僑抗日指導者にビザを発行しない対策を講じて、とりあえず、スマトラを撤退することを決めた。6日、胡愈之、王任叔、張楚琨、汪金丁、高雲覽等28人が船でメナンカバウに到着した。9日更に、船に乗って小島に渡った。16日、イギリス軍が日本軍に投降した情報を知った。地元の華僑の援助を得て、対岸の保東村に隠れてすむようになった。

本月、保東村に隠れている間、髭を生やし、インドネシア語を勉強し始めた。「乱世雑詩」を書き始め、故郷を思い、友人を懐かしく思う気持ちを作品に託した。

3月9日、王紀元と一緒に初めて、海辺の小さな村に疎開した。

4月中旬、名前を趙廉に改名して、スマトラの入口パカンバル地元の華僑指導者に身分を明かしてから、収容を拒否した。即刻村を離れるよう命じられた。

本月、「パカンバルへ行って陳金昭に贈る」という詩を作成した。

5月初め、パカンバルの旅館支配人の協力の下で、バスに乗ってパヤクンブー村へ移動した。途中日本軍の検問に遭い、日本語で応答した。目的地に到着した後、海天旅館へ向かった。バスの運転手が乗客に日本スパイと話したので、地元の人は彼を日本スパイと見て、冷遇していた。

月末、地元の華僑指導者を訪ねて、そこで、日本憲兵に遭遇した。華僑指導者の要請に応えて通訳をした。日本語が話せることを憲兵に知られた。

本月、地元の金持ちの車が盗まれて、日本憲兵に訴えたため、地元の信頼を取り戻した。

6月初め、プキチンギに駐屯している日本軍憲兵隊長がパヤクンブーに来た。強制的に隊長の通訳にさせられた。しかし、報酬は受け取らないことを声明した。通訳をしている間、抗日の人、華僑及び地元の人を救っていた。

8月中旬、メナンカバウから逃げてきた王任叔を自分の家に隠した。下旬、パヤクンブーに避難している多くの文化人の生活を維持するため、地元で募金した文化界難民救済費と華僑

投資を資本にして、趙豫記酒造を造り、社長となった。

9月、「無題四首 - 用詩紀中四律原韻」を作成した。

今年、「乱世雜詩」の十二首を含む十六首の詩を作った。

1943年（癸未 民国32年） 47歳

2月、疎開人の生活を維持するために、生産を拡大するので、金を集めて、製紙工場と石炭工場を立ち上げた。しかし、まもなく販売不振で廃業に追い込まれた。

5、6月、日本憲兵と一緒にブキチングを離れ疑わしい人の調査探偵に、出張した。

6月、ブキチングの日本憲兵の人事異動のチャンスを利用して、病気で入院した口実を作った。その後、日本軍医に賄賂をして、肺病の診断書を発行してもらったことにより、辞表を提出した。辞職を認められたが、いつでも出頭できるようにと言われた。

本月、ブキチングを離れ、パヤクンプーに戻り酒造工場を経営する。また、金を集めて、地元の住民のために華僑農場を開設した。

6、7月、パダン栄生旅館が繁栄しているため、日本軍が時々嫌がらせに訪れる。教育界の張紫薇に相談した結果、名目上ではパダン栄生旅館の株主になったため、ホテルの支配人になった。パダンとパヤクンプーを往来して、地元の人を助けていた。

7月、地元の人で紹介により、2回見合いをしたが、結果はなかった。

9月初め、日本憲兵の疑いを払うため、紹介により、パダンの華僑の娘何麗有（陳蓮月とも言う、1922年生まれ、1992年没）と婚約を結んだ。15日、パダン栄生旅館で結婚式を挙げた。パダン、パヤクンプー、ブキチングなどの地元の有名人も出席した。

本年、詩を四首作成した。

1944年（甲申 民国33年） 48歳

1月1日、万一に備えるため、遺書を作る。

1、2月の間、漢奸洪根培等の密告により、日本憲兵に本当の身分が知られ、秘密に監視されるようになった。

2月、巻き込まれることを心配して、胡愈之、沈茲九、張楚琨、高雲覽等の人に移動するよう通知した。

本月、日本憲兵隊の調査が厳しくなり、地元の華僑等の人々が逮捕され始めた。

8月、憲兵隊に連行され、尋問されたが、すぐ釈放された。憲兵隊も深く追求しなかった。

本年、何麗有との間に長男大雅（大亜とも言う）が生まれた。

本年、詩を一首作った。

1945年（乙酉 民国34年） 49歳

本年、絵画に詩を一首作成した。

1月1日、遺書を作った。国内外にある財産、物品の処理について、細かく記していた。そのとき、妻何麗有はまた妊娠した。

春、詩を一首作成した。

8月16日、ラジオから日本が投降したニュースを聞いて、嬉しく思っていた。そのあと、地元の華僑や文化人を集めて、連合軍を迎える準備委員会を組織することについて相談した。

8月29日、夜、日本憲兵に騙され家を出て逮捕され、すぐに殺された。遺体はブキチンギから7キロ離れた郊外に捨てられた。

8月30日、朝、妻何麗有は長女美蘭（梅蘭とも言う）を生んだ。

1952年、中国中央人民政府が郁達夫を烈士として追認した。

1953年8月30日、(ブキチンギの)文化界、教育界の人たちは郁達夫烈士及び日本軍が侵攻したときに犠牲になった11名烈士とともに華僑墓地に記念碑を立てた。

\*この「郁達夫年譜」は袁庆丰「欲将沉醉换悲凉・郁达夫传」の「郁達夫生平提要」(上海文艺出版社1998年11月出版)をもとに作られたものである。